

<b>Title</b>	松本周氏・柳田洋夫氏による「ニーバーの「恵み」の議論：『人間の運命』第4章「知恵・恵み・力」および第5章「恵みと高慢の葛藤」をめぐって」報告（科学研究費補助金「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第3回研究会）
<b>Author(s)</b>	鈴木, 幸
<b>Citation</b>	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.23-No.3, 2014.3 : 45-46
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4962">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=4962</a>
<b>Rights</b>	



聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository and academic archiVE

科学研究費補助金「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」第3回研究会  
 松本周氏・柳田洋夫氏による「ニーバーの「恵み」の議論—『人間の運命』  
 第4章「知恵・恵み・力」および第5章「恵みと高慢の葛藤」をめぐって」報告

2014年1月27日（月）聖学院本部新館2階会議室において、2013年度第3回目「ラインホルド・ニーバー」研究会が開催された。この研究会は日本学術振興会科学研究費補助金の基盤研究(B)「ラインホルド・ニーバーの宗教・社会・政治思想の研究」（課題番号：23320025、研究代表：高橋義文）の助成で開催され、総合研究所のラインホルド・ニーバー研究会との共催で行われた。翻訳中のニーバーの主著『人間の運命』から、恵みの議論として重要な箇所である「第4章と第5章」について、聖学院大学基礎総合教育部助教の松本周氏および聖学院大学准教授・人文学部副チャプレンの柳田洋夫氏よりご報告いただいた。参加者は13名であった。

第4章ではパウロによる「恵み」の理解について考察されている。第4章の冒頭は、人間の生には、生の意味を開示する「知恵」と、その意味を達成する手段である「力」の両方が備えられていて、その知恵と力が、神からの「恵み」であり、「聖霊の賜物と同義」であることが記されることから始まる。続く「恵みの聖書の教理」では、パウロの「恵み」の解釈には「人間の心の中における罪の征服」と、心の中でも「完全には克服できない罪を超える神のあわれみ深い愛の力」の二つの面があることが記され、その両面については「古い生」と「新しい生」との対比や、「転義」との関連から考察されている。第3節では、「聖書の教理の妥当性」を確立するためには、「人間の道徳的また霊的経験へ適用」させることが必要となることから、ガラテヤ書2章19節から20節が分析されている。そして、「恵み」は、「われわれ自身のものではない力としての恵み」と「われわれの罪の赦しとしての恵み」の二つの面で経験され、「恵み」を極端に強調することは、「神による決定論」を導き、また「新たな自己義認」に陥ることが考察されている。

松本氏は第4章の概要を述べた後で、「啓示」と「経験」の関係、ニーバーの「自己」理解、「結合点」、「霊の識別」、そして「歴史の成就」について意見を述べた。

一方第5章では、アウグスティヌス以前・中世教会・ルネサンス・宗教改革の各時代における「恵み」の理解が考察されている。まず序において、福音の真理に対して「人間の自尊心」がさまざまな形で抵抗してきたことが述べられることから始まる。続く第2節では、「アウグスティヌス以前における恵みについての概念」として、初期のキリスト教がギリシア・ローマ文化の二元論を打破できなかったこと、東方教会は完全主義であり、文化的にはヘレニズムが勝利し、宗教的には義認を教会が理解しえなかったことが考察されている。第3節の「恵みについてのカトリックの概念」では、生と歴史についての主要な問題は「恵みの罪に対する関係」であり、歴史に混乱と悪をもたらすものは「有限性ではなく罪である」ことと、アウグスティヌスの神学が議論されている。そし



発題者：松本周助教（左下）、柳田洋夫准教授（右下）

て、罪とは「原初的完成の欠損」であり、恵みは「不完全な自然の完成」であるとするアウグスティヌスとトマス・アクィナスの共通点に対する議論や、カトリックにおける教会観の誤り、カトリックと世俗の政治・文化の関係、福音と恵みに対する抵抗について述べられている。そして最終節において、「カトリック的総合の崩壊」と「ルネサンス的総合と新たな総合」が議論され、ルネサンスと宗教改革の考察がさらに必要となることを示唆することで章が締めくくられている。

柳田氏は第5章の概要を述べた後に、スタンレー・ハワーワスによる「罪と恵みについて」および「カトリシズムと教会について」のニーバー批判と、ニーバーにおける「運命」について、チャールズ・レマート等を参照して見解を述べた。

両者報告後の質疑応答では、“grace”は「恩寵」とも訳せるが、「恵み」をあてたことのいきさつや、歴史の成就をニーバーは否定的にとらえていることについて、高慢は“self-love”の一つととらえられるのではないかといったこと等についての議論が交わされた。また“destiny”の訳し方については、「運命」や「さだめ」、「宿命」といった日本語の検討と、そして“fate”や“telos”といった単語との比較検討がさらに必要となることが話し合われ、盛況のうちに研究会はお開きとなった。

(文責：鈴木 幸[すずき・みゆき] 聖学院大学基礎総合教育部ポストドクター)